



# 野悉蜜



凜音

やはり寝つかれなくて僕は眼を覚ました。酷く、息苦しい。寝間着の背中では気味悪く湿り、濃くなりすぎた夜の粒子は僕の気管を塞ごうとする。僕は泣き出しそうになるのを必死に堪えてベッドから這い出た。書き物用の小さな机の上に置いてある、硝子製の水差しと琥珀色の壺に入った睡眠薬だけが今は頼りだった。冷たく透き通った水差しからグラスへ水を注いで、四粒の白い錠剤と一緒に一息に飲み干す。それでも喉の奥へ絡みつ়夜の気配は僕の呼吸を難しくする。シーツを引き剥がして、それに包まり隠れるようにしてベッドの上へ座り込んだ。

古くなった壁掛け時計の針さえ、蒼い月の光に照らされて輪郭が判る。短針は二を過ぎた所を指していた。遮るものの無い紺碧の空に架かった月も、夜に染められて仄かに蒼く、然し何時もより強く辺りを照らしていた。分け隔て無く景色を照らす其の光は、カーテンを閉めなかった窓硝子を通り抜けて、書き物机とベッドと、ベッドの上の僕とを白く浮かび上がらせた。部屋の中は暗く、狭い。月の光によって其れを確認した僕の胸は息苦しさと孤独感とに一層強く圧迫された。

こうなる事は判っているのに、僕は毎晩カーテンを閉めずに眠りに就こうとする。雲は無い筈なのに何時でも霞んでいる月の光は、或いは云い伝えの様に浴び続けたら狂ってしまうのかも知れなかった。降りてくる月の光は、遮らなければ何時までも僕を狂わそうとするだろう。けれども沈殿した闇色の粒子は僕の手足や意識までも拘束する。

南の方向に天井から床まで大きく開けられた、出入り口も兼ねた白枠の窓は、磨き上げられた鏡の様に僕の顔を映して黙り込んでいる。硝子窓に映った僕は白いシーツを頭から被り、怯えきった眼差しで僕を見つめていた。否僕だけでは無く、硝子面をたゆたう幾つもの蒼い影や記憶のフィルムをもだ。端に映ったかと思えば其れは次の瞬間にはふと消え、又別の記憶が別の場所に現れる。古い映画を見ているようだった。但し其れは世界で一番見たくも無いものでもある。何が厭だと云う訳でも無く辛いのは、そこに浮かんだ記憶は僕のものなのに、実際にそれを体験した記憶が僕から欠落していることだ。又は其れは夢と呼ばれるものかも知れない。

僕は暫く其のフィルムを眺めていた。徐々に息が苦しくなる。心臓は過剰に働き出した。それなのに喉の奥で未だ渦巻いている濃密な夜の粒子は膜を張って、肺に酸素を取り入れることを赦さない。忙しくなる呼吸とともに喉が又渴きだす。シーツを被ったまま、窓際の書き物机に近寄った。水差しの水まで蒼く見えたが、硝子の曲面に触れてみると其れは確かに冷たく、揺すってみればちゃぶちゃぶと音を立てた。僕はグラスへ注ぐのも忘れて、水差しの縁に唇を付けた。割に重い水差しをしっかりと支えて傾けると、冷たい水が僕の中を流れていくような感覚を覚えた。

"kon'-kon',"

窓を叩く者がある。僕は半ば零しながら飲み下す手を休めて、南の窓を見た。白い寝間着を着た少年が立っていた。僕と眼が合うと、彼は月に照らされた白磁の頬にふわと笑みを浮かべて再

び硝子を叩いた。

"kon'-kon',"

「...やあ、」

彼は僕が眠れなくなってから毎夜毎夜僕の許を訪ねてくる。眠れるようにと、錠剤の入った琥珀色の小壘を呉れたのも彼だった。年の頃は僕と同じ位だと思うのだが、夢のように儂い容貌から実際どうなのかは窺えなかった。濡れ羽色の真っ直ぐな髪と眼帯に覆われた左眼に髪と同色の瞳。整った鼻梁とその下の何故か目立って紅い唇、透るように白い肌。白い寝巻きの袖から細い手首を覗かせて、彼は硝子を叩いた位置に未だ手を挙げていた。僕は書き物机に水差しを置いて、窓に近づいた。蛇腹式になっている窓を押し開けてやると、彼はやっと手を下ろした。「水差しから直接飲むなんて、行儀が好くないな、」

何時もの通り、部屋の中へは入って来ようとせずに、僕が外へ出る為の道を開けて彼は笑う。ちょっとしたポーチの様になっている窓の外へ素足をつけると、白く塗った樹の乾いた感触が冷たかった。構わずに、外へ出る。後ろ手に窓を閉めると、辺りはそれきりもう音がなくなった。

「零しているね。あんな飲み方をするからだ、」

彼は僕の寝間着の胸元に広がった水の染みに手を触れると微かに眉を顰めた。其れは本当に些細な変化だから、気を付けなければ見落とす類のものである。僕は彼の手首を取って、触れていた処から離れた。

「直ぐに乾くよ。」

「...そうだね、」

僕等はそんな会話をして、月の明かりの許へ歩き出した。黒々と広がる野原は時折吹く風に揺れる草に深く覆われている。二人とも素足だが、草は柔らかく足が傷付く事は先ず無かった。暫く黙ったまま、僕等はただ野を歩いた。

眠っているのに何故突然に躰がびくと跳ねるのか、僕は其れが不思議でならない。其れはとても理不尽な気の付き方だと、眼の覚めた僕は思った。汗をかいた寝間着の気持ち悪さを呪いながら皺になったシーツの上に躰を起こすと、相変わらず月は僕の部屋に霜柱を植えつけてもするかの様に輝いている。室内は、ささやかに置かれた家具の輪郭がぼんやり判る程度には明るかった。息苦しさに寝間着の釦を一つ外して、ベッドからのろのろと降りる。書き物机の上の水差しからコップに水を注いで口に含んだが、飲み込みたかった筈なのに中々飲み込めない。何とか無理に飲み下して、グラスを置こうとした。ふと、視界に琥珀色の小壘が移りこむ。

(是を飲んだら何も考えずに眠れるよ。不安も孤独も、君を眠りから遠ざけはしない——何故なら是は其の精神から君を切り離して、安らかに眼を閉じさせてくれるから、)

囁く声がこだました。けれども彼の姿は何処にも無い。僕は其の事に云い様の無い恐怖を覚えた。

壇の蓋に手を掛けて回す。逆さまにすると、錠剤が掌から零れた。然し僕は正確に其の個数を記憶しては居ない。数え終わるより先に僕はグラスを煽っていた。

“cachi-cachi”

屋外だと云うのに辺りは全くの静寂に包まれている。其の為に彼の持っていた懐中時計が時を刻む音さえ聞こえた。螺子式の、古くはあるが機能的で上品な姿をした其れは然し、狂っているのだと彼は云う。

「進むことは進むんだ。けれども何時の間にか逆へ回ってしまって。又何時の間にか右に回りだす。決して止まりはしないのに――僕が螺子を巻いているからなのだけれども――、同じ時間帯をずっと繰り返している、」

懐中時計はくすんだ銀色をしており、蓋と、同色の細い鎖とが付いていた。文字盤は中心部から円形に硝子が嵌め込まれて中の機械が見える作りになっていて、硝子の入っていない部分は地の銀に黒曜石をあしらってある。黒曜石の位置が大まかな時間を示すらしかった。とても精巧に出来ている。

「是が気に入った、」

何時しか其の時計に見入っていたらしい僕に、彼は柔らかく笑いかけた。髪がふわ、と風に靡いて、蜜の香りがした。何処かで嗅いだような其の香りに、僕は呆けたように頷いた。

「...そう。気に入ってくれて嬉しいよ、」

答えた彼の笑顔はどこか寂しそうで、然し嬉しそうであるとも僕には取れた。

月は未だ其の輝きを失っては居ない。唯是程までに明るいの、何故か磨り硝子の珠のように輪郭がぼんやりしていた。僕等は深く茂った草の中に座り込んで肩を寄せ合って居た。会話も殆ど無く、座った姿勢からでは頭より高い草の中から唯月を見ている。其れだけで眠れない夜も安心した。

もしかしたら。もしかすると僕は眠れないのではなく眠りたくないのではなかろうか。不意にそんな考えが頭を過った。完全に外界と隔絶され意識の沈殿する睡眠を恐れているのか。眠らなければ、肉体的にも精神的にも不調を来す。不眠から来る不健康、不健康から連想される病、やがて至る死――そういったものは怖かったし、眠る事で其の現実から逃避することは出来た。だが然し、其の逃避の術さえも今奪われようとする中で、僕は何故眠りたくないなどと考えたのだろうか。

隣で彼は白い首を伸ばして月を仰いでいた。いっそ月に融けてしまうのではないかと見紛われた彼の姿を、僕はゆっくりと網膜に焼き付けた。彼の後ろで星が黙って輝いている。夜は何時其の上澄みを見せるのだろうか。瞬く星は何時か其れすら沈殿しそうだった。

白い部屋の白い天井には蒼い波紋がたゆたっている。小刻みに震え止めど無く姿を変えていた其れは、グラスの底に少し残っていた水の乱反射だと判った。唯其れが判る頃には、天井は少しずつ回り始めていた。喉が酷く渴いたが、眩暈で周りがよく見えない。起き上がることすら不可

能だった。息を吐き出してみる。視界の回転が少し収まったような気がしたが、直ぐに其れが錯覚である事に気付いた。逆回転しているのだ。眼だけはうっすらと開いたまま一一閉じることも、見開く事も叶わなかった一一僕の視線は回る天井に釘づけになっていた。揺れる波紋と、月の光。僕は何となく、遊園地の回転木馬を思い出していた。夢の様な電飾と、笑い声。白い花の薫る頃、吐き気を催すようなあの甘い香りの中で、僕は白い馬に乗って、柵の外へ笑いながら手を振ったのだ。相手も、笑いながら手を振り返してくれた。スピーカから流れる子守唄に合わせて口笛を吹いていた其の横顔が、少し寂しそうだった事を思い出した。

胸が重くなる。呼吸が巧く出来なくなってくる。意識がだんだん濁り始めたが、其れは眠りに落ちる瞬間に似ていた。視線は相変わらず天井に張り付いたままなのに、僕は窓の外の彼の存在に気付いた。

白い寝間着の裾は露に濡れたのか少し重くなっているようだった。両眼を閉じたまま彼は細い腕で水差しを抱えていた。水差しの中には眼帯が浮かんでいた。彼の左眼にかかっていたものなのだろうと僕は思った。但し其れは紅く汚れている。水自体は濁っている様子も無いが、ガーゼの部分には紅い染みが付着していた。僕の視界が点滅する。息を吸おうと唇を開いてみる。

彼は唐突に眼を開いた。紅い唇が言葉を形作る。無論この距離で何を云おうとまどろみつつある意識では聞こえる筈も無いのだが、僕には其の唇が読み取れた。

久し振りに眠いという感覚が襲ってくる。僕の眼はもう随分前からおかしくなっていたのだと其の時知った。月の輪郭がぼやけていたのではなく、僕の視界がぼやけていたのだ。この眼を閉じて暫くすれば、僕の意識はずっと深い夜の底へ沈んでいくのだろう。そして屹度浮かび上がる事は出来ない。

『連れて行くよ、』

彼は確かにそう云った。

“ga-shan’,ga-shan”

例えば其れはモニタに映し出された画面のように奥行きが無く、レンズの前でしきりに動かされる写真のように張り付いたままだったのだが、僕のおかしくなった眼にはもうそう云う風にしか彼は映り込まなかった。眩暈が酷すぎて、彼の後を追うのも大変だった。

彼は僕の十歩向こうに立って、白い寝間着姿で水差しを抱えて立っている。此方を見据えて、口許には微笑みさえ湛えていた。写真を追いかけているような気分になるが、然し彼は確かにそこにいる。逃げているのではない。寧ろ彼は僕の半ば見えなくなった眼の代わりに僕を導いているのかも知れなかった。時々入り込んだ月光に、彼の隠されていた左眼が反射して光った。草は僕等の腰ほどまで茂り、吹く風に緩く波打っている。ついに翳りだした月の光の下で草深い野は海へと姿を変えてゆく。不意に彼が見えなくなると、張り詰めていた糸が切れるように僕の膝から力が抜けた。息が切れる。泣き出したくなるのを堪えて、僕は然し俯いた。

眩暈が酷かった。視界と云わず僕と云わず、世界中がどろどろと融け出した。揺れる草は波に変わった。其の合間から伸びてきた白い腕は、水差しから濡れた眼帯を取り出して僕の脛へあてがった。頬に首に水滴が滴った。足許から浸水が始まる。

大きな風が吹いて、野が波立った。僕等の意識は攫われていく。黒い夜の沈殿の底に僕らが辿り着く頃には、僕は彼が口笛が巧かったことを思い出していた。